

ウェールズの社会環境について — 言語的側面を中心として —

後 藤 信*

A Study of Social Surrounding of Wales — Especially of Linguistic Aspect —

Makoto Gotoh*

We Japanese are apt to think that Wales is only a marginal part of Great Britain, and Wales to England is as our home area “*Chugoku-chihou*” is to “*Kantou-chihou*”, the metropolitan area in Japan.

But, in fact, Wales was once an independent country from England and the Welsh people is descended from the Celts, who had a different language and culture from the Anglo-Saxon family.

So we have to know the historical procedure of the merger of subsidiary Wales with its parent England culturally or linguistically as well as politically. The development or decay of the currency of one language depends not only on the outward social influence but on the natives' steadfast and continual endeavor to make their mother tongue survive the linguistic struggle for existence among the language powers of the world. Welsh cultural resistance to the supremacy of England in the long history is noteworthy and to be remembered.

In conclusion, I'd like to pick up the meanings of linguistic or cultural unification of Wales and England in order to discuss which instance we Japanese, monoglots in an island nation, should side with/against, the people having one common convenient language like in the USA or a polyglot nation keeping its respective different culture and language like in Europe before the coming age of the EU.

Key Words (キーワード)

Wales' cultural rebellion against England (ウェールズのイングランドへの文化面の抵抗), The rise and fall of Wales (ウェールズの盛衰), Welsh prospect for the future (ウェールズ語の将来的な展望), People's identity & language (民族の帰属意識と言語)

はじめに

Wales! ウェールズ! これは実に懐かしい言葉である。この言葉は1933年生まれの私が1941年、昭和16年の12月、小学校の二年生時に(当時は小学校ではなくて、独語の Volksschule の直訳語

である“国民学校”と言っていたかも知れぬ)既に私の語彙メモリー装置の中には入力されていたからである。

言うまでもなくそれはその年、開戦直後に英国の誇る主力新鋭戦艦のプリンスオブウェールズが日本軍航空機によって撃沈され、その報道の生ん

*呉大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

だ当時の国民的なセンセーションの渦の余波が子供心にも波及していたからだと思ってしまう。

戦後、英語を習う年齢に達して、プリンスオブウェールズの“ウエールズ”という地名を、いわば、日本艦船の命名に見られる“加賀”とか“武蔵”といった風に England と言う国の、そしてその言葉のカテゴリーが内包する中での一領域、つまり、一種の province が艦名となっている例に当てはめて考えてみた。そして、その英国戦艦名は“ウエールズ領の宮様”という意味なのだと思いついていた時期がある。

更に後、The Prince of Wales の意味が実は英国皇太子の称号である事を知った。何故それを The Prince of England と言わないのだろうかという疑問に思いついて英国史を紐解いて、漸く、そのいわれを知るに至ったのは記憶に新しい。

ところで、1996年夏、機会を得て遂にそのウェールズの地を踏む事が出来た。そのウェールズの首都カーディフにおいてのこと、ふと立ち寄った書店の書架の中から探し出した一冊の本、The Celtic Revolution, A Study in Anti-imperialism by Peter Berresford Ellis の内容は私にとってウェールズに対する認識に一つの開眼をもたらすものであり、又、啓示とさえも言えるものであった。

それまで植民支配地域の英本国に対する独立運動やその歴史と言えば、インドを始めとしたヨーロッパ圏外の国々か、或いは、隣の島のアイルランドなどを想起するのが自分にとって視野の限界となっていた。ウェールズと言えば、英本土の一角であり、地域面積があまり広くない事もあって、政治、宗教、民族そして歴史などイングランドと一体であり、一枚岩を成しているものと、とかく思いこみがちであった。

然し、ウェールズの人々の多くは非アングロサクソン系のケルト民族の末裔であり、その独特の文化の継承者である。被征服民族としての屈辱の耐え、千年にわたって英国への同化を強いられながらも、文化的な独立を守ろうとして今日なおも

抵抗と独立の運動を止めようとしなない誇り高き人達である。その視点に立ってウェールズを紹介し、そして又現在その地が抱えている諸問題に触れてみたいと思う。

[I] 英国とウェールズ

英国を紹介する場合、十九世紀ヴィクトリア時代における絶頂期の英国を大英帝国 the British Empire の名を以て示すことは如何にも自然で分かり易いものがある。

二十世紀に入ってその植民地が自治の獲得、そして独立の気運を昂揚させてゆく過程の中で、それは英連邦 the British Commonwealth と言葉に改めるに至る。

これとは別に、英連合王国 the United Kingdom, UK と言う言葉がある。これは政治地理上の区分による言葉である。ウェストミンスター議会の及び行政政府の統治の及ぶ範囲を指し、The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland の略語で、イングランド、スコットランド、ウェールズ及び北アイルランドの地域を包含している。

Great Britain または GB と呼ばれる用語もある。これは連合王国から北アイルランドを差し引いた地域、つまり英本土と言うか、イングランド、スコットランド、ウェールズの土地を合わせた大ブリテン島を指している。大ブリテン島は古代ローマ名の Britania を以て表すことがある。同時にこれは英連合王国を指す場合もある。British とは古代 Briton 人の意味で、その語源はケルト語である。フランスのブルターニュ地方を指す英語の Brittany そして仏語の breton は同語源である。ウェールズ語では Brython となる。

the British Isles とは、大ブリテン島に加えて、アイルランド共和国を含むアイルランド全土、更に、マン島及び隣接する島々から成り立つその全域である。

次に England 或いは English という言葉は

我々日本人によく使われるが、意味の紛らわしい言葉である。Englishman と言えばイングランド人であり、ウェールズ人は Welsh, スコットランド人は Scots である。辞書にも English とはブリテン島の中の“イングランド地方の属性”を述べた語であることを先ずは最初に定義している。the English nation などの場合に用いられる英国自身を表す語としての English とは、British が持つ意味と同じである。England の語源はゲルマンの一部族の土地 Angles'land であり、その発祥地は北ドイツである。一方、British の方は仏のブルターニュ、英のコーンウォール、そしてウェールズとを cover するケルト語系の一派である Brythonic の使われた地域と関連を持つ語である。

English とは、丁度、日本語の“やまと”，即ち、大和または倭が、近畿地方の一国を指すと同時に、それが大和撫子とか大和心などの例に見られるように日本全体をあらわす用例にも使われているのと似通っている。“やまと”と England とはこのようなアナロジーが見られるのである。

ところで、ネルソン提督がトラファルガー海戦の際に発した、かの有名な言葉

“England expects that every man will do his duty.”

は、その後、日本海海戦の際の東郷元帥による訓辞の original version として日本でも良く知られている。ここで言う England とは言うまでもなく英国全体を指す語である。international rugby football match の場合におけるようなウェールズやスコットランドと横並びの単位と言うか、同じ位取りのイングランドではない。

ここで辞書によるこの語の定義を今一度参照してみよう。

—the name is sometimes loosely used for the whole of Great Britain, a use that is understandably resented in Scotland, Wales and Northern Ireland. —¹⁾

いずれにせよ、イングランドと言う言葉が

Britain の総称としても用いられうるところにこの国の歴史の全てが物語られていると言っても過言ではあるまい。ウェールズはブリテン島の西端に位置する一地域である。英国とウェールズとの行政地理上の区分を示す用語には border が用いられている。

border とはスイスとイタリアとの国境や、米国とメキシコとの国境などの場合にも使われる言葉である。但しウェールズとイングランドの間を通過する場合には 国境通過の検問所ではなく、又鉄道を利用する場合もヨーロッパの国境通過の際のようにパスポートの提示を求められることはない。我が国における県境通過の場合と全く同じである。但しその border を通過してウェールズにさしかかると ウェールズの旗を表す red dragon 赤い龍のマークに添えた文字 Welcome to Wales (英語) と Croeso i Cymru (ウェールズ語) の両国語を標示した道路標示の notice-board が見られる。始めて足を踏み入れた旅人はその地が別の言語文化圏であることを知らされるのである。共通の言語を持つドイツとオーストリアとは現在は政治的にはそれぞれ独立した別々の国家である。その国境通過の場合に較べてイングランドとウェールズへの移動の時の経験は対照的であると言えるかも知れぬ。

NB Union jack 英国の連合象徴旗がそれぞれの国の守護聖人イングランドの Saint George, スコットランドの Saint Andrew, アイルランドの Saint Patrick の象徴である三つの十字架の図柄を組み合わせた図案となっていて、何故ウェールズの守護聖人 Saint David が加わっていないのかと言う疑問については、連合王国が出来上がる以前にウェールズは1284年に既にイングランドと一体となっていたためである。ちなみにスコットランドのイングランドへの併合は1707年、アイルランドの場合は1800年である。

English の方がウェールズ語よりも多く話されているウェールズ南部地域でも道路標識は勿論の事、書店の書架の上に示された書物の専門別分類表示もすべて二カ国語の標示が行われている。首

都カーディフの国立博物館では同じく二カ国語の図録が用意されている。二カ国語の標示のあるヨーロッパ各地の国際空港で経験するゲルマン系の独語と英語、英語と蘭語そして又ラテン系の仏語や伊語と英語を並列掲示を見た場合と較べても、ケルト系言語と英語との隔たりの方がそれらよりも遥かに大きい事を痛感させられる。ケルト系の語の多くは全く難解そのものである。

然しながら、例えば英語の park が ウェールズ語では *parc* となっていて、その綴り文字が仏語の *parc* と同じであったり、taxi が *tacsi* となる場合のように、ウェールズ語の意味が何とか英語から類推出来るものも稀にはある。

イングランドから国境を越えてウェールズに入るとウェールズ地名の幾つかの特徴に気付くのである。例えば Llan- で始まる地名の多いのには目を見張る程である。これは church の意味を表わす語である。その他 *glyn* は glen or valley, *afon* は river, *bedd* は grave, *bryn* は hill, *bach* は little, *ffordd* は road, *nant* は valley, *pont* は bridge, *pen* は top, *llyn* は lake などを表している。

人名の特徴はどうであろうか。

ウェールズには同姓同名の人が沢山いる。電話帳にはそれが3ページに亘っている場合もある。ウェールズでは歴史上の人名の場合にはその年代を添えての検索が必要となる。或いは某の人物の現住所の地名や出身地なども必要となろう。

次の詩を見てみよう。

Take ten, and call them **Rice**.

Take another ten and call them **Price**.

Now **Roberts** name some hundred score

And **Williams** name a legion more

And call, he moaned in languid tones,

Call the other thousands-**Jones**,²⁾

強調字体の部分は筆者の責任によるものである

この詩において、下の行に下がって紹介される名前程、その数が多いさまがユーモラスに描かれている。1535年迄はウェールズにはイングランド

人の場合のような家族名(姓)は無く、父の名前にその所属の ap を繋いでその息子の名前を加えていた。ヘンリー八世による改革の圧力によってその後はイングランド式の姓名方式を採り入れるようになる。ここに出た ap Rice の ap は son of の意味である。ap とその次にくる父の名がつかまって発音され、省略形 Price となったのである。Probert Prichard

ところでアジア大陸、中国に近接した島国日本と、ヨーロッパ大陸をすぐ側に持つ近似した地理条件の島国英国とを比較してみよう。それぞれ遠い過去には文字を始めとする大陸文化の影響があり、共に大陸からの侵略を蒙った歴史もあった。そしてそれとは逆に、近代史において日・英両国がそれぞれが帝国として海外発展を求めた過去の類似経験を共有する事などもあって、とにかく、英国と日本を重ね合わせて眺め、その共通性を求めようとする人々が多いのも事実である。

然しこのウェールズが島国日本の中における東北地方とか中国地方と言う範疇とは全く異なった土地である事を先ずは知っておく必要がある。ある意味で英国は、旧ユーゴスラヴィアのようにクロアチアやセルビアなどの多民族から成る国家、その他、ヨーロッパ大陸における文化や宗教の十字路となっているような国々などとも共通の要素を持っていることを踏まえておく必要がある。そこを出発点としてウェールズとは、そして英国とは何であるかを考えてみようとするのがこの小論の目的である。

[II] ウェールズの自然及び社会的な環境

ウェールズはカンブリア紀系の連山におおわれていてそれがイングランドとの自然の障壁としての役目を効果的に果たしている。メキシコ湾流の影響によって緯度の割には冬暖かく、夏は比較的に涼しい穏和な気候に恵まれている。

ウェールズの広さはスイスのおよそ半分の広さ、米国マサチューセツ州とほぼ同じ、そして我が国の四国よりやや広い程度である。日本におけるウェー

ルズの知名度及びその土地の歴史、文化そして産業への一般の関心度はイングランド、スコットランド、アイルランドに較べて低いものがある。ウェールズに関しては、観光ガイドブックを始めとして、日本語に翻訳された学術性を持つ著作物や、又、日本人自身によるも著作文献を日本の書店で探し求めることは極めて難しい現状である。イギリス編の一部として僅かのページを持つに過ぎない。ウェールズは南部、中部及び北部三つの区域の分けることが出来る。

ウェールズの全体の中で、北部及び中部地方の多くの地域的な特性ははスイスに似て高地や丘陵、山岳地帯となっている。UKの中でウェールズは最も降雨量に恵まれ、多くの川や湖を作り、その水はイングランドにも供給されている。

土地は農耕には適してはいない。羊の飼育には好条件を整えており、中部ウェールズでは今日でも羊の頭数はその地の住人の10倍となっている。その昔、羊を追って移動した幾つかの道 the drove roads は丘陵を越えてイングランドまで伸びており、現在は遊歩道となって観光の対象となって人気を集めている。

“暑い日がほとんどなく、常に大西洋からの微風を受けて湿気の多い気候は、植物類に苛酷な制限を課している。樹木はきわめてわずかの背丈しか伸びず、耕作も低地しか持ちこたえられない。肥沃で豊穡な部分は、周囲の平原だけである。そこでは果物類や小麦が実り、野菜類も成長するが、他の場所に行くと、畑では、せいぜいオート麦か家畜用の蕪くらいしか育たない。そして高いところに登るにつれて、農耕の形跡は急速に消え失せてしまう。そこおに残されているのは・・・中略・・・瘦せた放牧地だけである。そこでは時おり、空積みの小さな壁が、牧場の存在を示している。だがほとんどの場合、視界をさえぎるものは、土地の自然の起伏だけである。こうした広大な広がりの中に、ウェールズの財産そのものである羊の群れがさ迷っている。” 後略³⁾

ウェールズの時刻表示はイングランド及びスコッ

トランドと同一のGMTグリニッジ標準時に統一されている。東京との時差は9時間、大西洋を隔てたニューヨークとの時差は5時間である。

又、ウェールズは三方に1,200キロの長さ及び美しい海岸線を持つ半島をなしている。ウェールズの土地面積は20,800平方キロメートルで、人口はおよそ2百70万人である。それはニュージーランドの総人口よりやや少なく、広島県の総人口にはほぼ近い数字である。その中の27.5万人は首都カーディフ市内に、更に7.5万人の人達がここから30分以内の通学、通勤圏に住んでいる。

ところで、イングランドの人口は4千7百50万、その面積130,000平方キロメートルである。スコットランドの方は人口が5百20万で、所有面積は78,000平方キロである。それぞれの political status の特徴を見てみると、イングランドとスコットランドが Constitutional monarchy であるのに対してウェールズの方は Principality of Great Britain と呼ばれている。

ウエストミンスター議会の下院における議員の地域別選出者数を眺めてみると、イングランドは524名、スコットランドは78名、北アイルランドは17名、そしてウェールズは38名となっている。これらからも察せられるように、ブリテン島においては島の南部に位置するイングランドへの人口の集中が見られる。ブリテン島全体における南北の人口や暮らしの豊かさの対比、明暗がそのままウェールズにおいても見られる。

即ち、人口はカーディフを中心とした南部地域に集中した現状がある。東海道ベルト地帯と日本海沿岸地方との間の人口過密や過疎の対照の現象が、片やウェールズやスコットランドと、今一方のイングランドとの間で見られるのである。

ところで十八世紀後半に起こった産業革命はウェールズの山野の姿を変えてゆく。ウェールズは製鉄に必要な鉄鉱石と製鉄作業の原料となる石炭の埋蔵量に恵まれていた。十九世紀の初頭に入ると蒸気機関による鉄道の敷設や道路網、そして海外向けの鉄石の積出港としてカーディフ港の整備などによってウェールズの人口は1801年の人口調査に

よれば58万人であったのが1921年には一挙に2億60万人へと膨れ上がってゆく。製鉄の溶鉱炉用として、鉄道の、そして洋上の船舶の燃料として、或いは又、大都市ロンドンを smog で覆った工場並びに家庭用燃料として、石炭の需要の伸びは南ウェールズに繁栄をもたらす。恰も石炭王国の出現の観を呈したかのようであった。炭坑夫を中心としてウェールズの民族的な伝統に根ざした男性による choral singing や、地方のラグビーチームへの肩入れなどウェールズ独特の文化が生まれてゆく。

音楽はと言えば、ウェールズには毎年の夏に催される Eisteddfod の祭典がある。これはウェールズ国民的な祭典であり、中世の吟遊詩人の頃より伝わる詩と歌とハーブ伴奏を総合したウェールズの文化の精華である。

ところで、ウェールズ語の発音が聞く人の耳に美しく響き、話し言葉自体が音楽となっていると言うのは多くの書物の中で識者が異口同音にそれを指摘している。

シェクスピアも登場人物の言葉を借りて次のように述べている。

thy tongue

おまえの舌にのるとウェールズ語も美しく
Makes Welsh as sweet as ditties highly penn'd,
ひびく、まるで美しい女王が夏の四阿で、
Sung by a fair queen in a summer's bower,
ひとりリュートにあわせて口ずさむ調べ高い
With ravishing division, to her lute.

歌のように聞くものの心をうっとりさせる

「ヘンリー 四世 第一部」3幕1場⁴⁾

炭坑の繁栄期にはウェールズの男性の三分の一が炭坑労働に関わるという盛況を見せるが、同時に全英各地域からの人口の流入を招く。それに伴ってウェールズ語ではなく英語の普及が目立つようになる。

然しながらその炭坑も1894年に290人、1901年には81名、1913年には440人の死者を出す地下の爆発事故に見舞われる。そして1920年代の大スト

ライキなどに加え、石炭から石油へのエネルギー転換によって一時期賑わった炭坑も閉山が目立つようになる。

1921年には27万人もいた炭坑労働者の数も1947年には11万5千人と減少し、更に1980年代になると南ウェールズでは五ヶ所、北ウェールズでは僅か一ヶ所の鉱山が操業を続けていて、4千人の労働者を抱えているのが現状である。

ウェールズの鉱山の盛衰記はジョンフォード監督による往年の名画 HOW GREEN WAS MY VALLEY “わが谷は緑なりき”の中で炭坑夫の一家の物語を通してリアルに描かれている。子供までも鉱山で働いていた当時の実態や経営者と労働者の暮らしぶりや、階級差の生む生活文化やの差違などがそこには映し出されている。

廃鉱の跡地では、牧草や樹木の減少や、そして粉炭を含む地肌がむき出しになって荒れ果てた様相を見せている。現在、元の自然の土への還元、再緑化事業、re-greening 化が進められている。

産業革命後の一時期、賑わいを見せた旧炭坑施設をこの地域の歴史の語り部として、又、生きた博物資料館としての再利用が進められている。或いは、修学旅行として訪れた学童、生徒達のため炭坑作業行程の疑似体験を通しての学習の場として利用出来るような観光及び野外学習施設への転換を行って、地域経済の活性化と旧炭坑作業従事者への一部雇用吸収を図ろうとする動きもある。

ウェールズにあるこれら産業城下町の跡地、或いは又、ノルマン期に建てられた多くの城郭、山岳地方を走る狭軌道のSL列車、産業革命以前の民芸品の制作と販売、遊牧する羊の群の風景、大気的清純で美しい湖水や河川を懐く山野などを観光資源として、脱工業後の新たな商品化は可能である。目下、国内外からの観光客を引き寄せてホテルや飲食産業に潤いをもたらしている。その数は年間60万人で eisteddfod の際には12万人を集めている。然しながらいずれもパリやロンドンの集客力には遠く及ばない。

時代の推移の中で自然環境が蘇ったのは賞すべき事である。然し、雇用の確保と経済生活の維持が

それと両立しない一面があることをも忘れてはならない。

過疎地域には原子力発電所も設けられて作動している。又、ウェールズの首都カーディフの近くの the Valley には現在はソニー、日立、シャープ、ナショナルなどのエレクトロニクス産業を中心とした日本企業が進出してこの地域の過疎対策の一翼を担っている。

There is no present in Wales,

ウェールズに現在はなく

And no future;

そして未来もない

There is only the past,

あるのは脆く崩れそうな過去の遺跡のみ

Brittle with relics,

偽者の亡霊の棲む、

Wind-bitten towers and castles

風に打たれて身をさらす

With sham ghost;

塔や城郭

Mouldering quarries and mines;

石切場や鉱山の朽ち果てた姿

And an impotent people,

同族間結婚によって

Sick with inbreeding,

病める不能者たち

Worrying the carcase of an old song.

古き歌の亡骸を口に嘆じつつ

—by Reverend Thomas—now living in retirement on the Llyn peninsula⁵⁾

[Ⅲ] イングランドによる征服とウェールズの抵抗の歴史

ウェールズには氷河時代より人々が住んでいた。然し文化的な起源は紀元前500~100年前、ケルト族がこの地への侵入した時期に遡る。ブリテン島への移住は波状的に行われたものと思われる。

ケルトと言う言葉はギリシャ語の“*keltoi*”の

その端を発する。その語の意味は“hidden people”である。ケルト人がその学識や文化を文献として世に残そうとしなかったからだと言われる。紀元前700年頃より中央ヨーロッパに在住して Celtic ケルト語を話す種族で鉄器を使用し、勇敢な戦士達であった。北はブリテン島やアイルランド、南はスペインやフランスに、東はドナウ河流域から小アジアへそしてイタリアやギリシャへと広く跨って暮らしていた。

紀元前四世紀にはローマへの侵入を試みるが、やがてローマとの戦いに敗れ、ローマ軍の隆盛とは逆にケルトはヨーロッパ大陸においてその勢いを次第に失ってゆく。

紀元一世紀にはローマ帝国の支配の及ばないアイルランドやスコットランドがケルト族の支配地域となるのである。

ウェールズにおける初期の定住者は羊や豚を先導し又少量の穀物を栽培して暮らしをたてていた。紀元43年にローマ軍がこの地に侵入した時に彼らは人間の生け贄の儀式をも持つドルイド教を信仰している現地ケルトの人々に出会った。ローマ軍は30数年の長い時間を費やしてやっとその地の征服を完了する。

紀元410年にローマ軍が撤退した後も、ウェールズは東にアングロサクソン、西にはアイルランド人の侵入の脅威にさらされる。

国内では又群雄割拠の状態が続き一時期 Guffydd ap Llywelyn が国内統一を達成するが長続きはせず、1063年にイングランド軍に打ち破られる。その三年後イングランドへの征服に成功を取めたノルマンフランス軍はウェールズへの侵攻のための前哨基地となる城を築いてゆく。その結果、中部及び南部ウェールズはその支配地域となる。北部ウェールズは高地が自然の要塞となって敵方の侵入を防ぐことが出来た。

ところで現在ウェールズに残る多くの城はアングロノルマンの手によって建てられたものである。Castel-y-Bere の場合は 九世紀から十一世紀の間ウェールズは小国に分かれていたウェールズの統一を果たした Llewlyn ap Iorwerth, 後の

Llywelyn the Great 公によって1220年に築城が始まったウェールズの要塞である。その息子が Prince of Wales の戴冠を行う。その孫である Llywelyn the last はウェールズからイングランドの駆逐を企てて Edward 一世による反撃に遭う。Edward 一世はこの機にウェールズの征服を決意し屈服させ、自らの世継ぎに Prince of Wales の称号を与える。ウェールズの国民を懐柔して被征服者として生じがちな反イングランド的な感情をかわす事に努める。以後歴代のイングランド王の第一子は Prince of Wales の称号を与えられるのが常となる。

後で述べる事になるが、現英国の皇太子 Prince of Wales の Charles の場合も1969年に Caernarfon Castle において華々しく立太子の式典を行っている。ウェールズが principality, prince の支配する国或いは属国と称されるのはこれ故である。同じくケルト系民族の住むアイルランドの場合と同様に、ウェールズのイングランドの支配に対する抵抗運動、イングランドからの政治的、文化的な独立運動はその後の歴史の中で展開されてゆく。

その主なもの2, 3を挙げてみたい。

その1. Owen Glendower の独立運動

Glendower は the princes of Powys and Deheubarth の後裔とも言われる。1399年以前にはウェールズの裕福な地主の生活を快適に過ごしていた。彼はロンドンで法学生の生活を、その後リチャード二世の従者としての生活をしてきた事がある。

シェクスピアの「ヘンリー 四世」の中の描写によると

I can speak English, lord, as well as you ;

おれだってきみに劣らずりっぱな英語が

I was trained up in the English court;

話せるのだ、イングランドの宮廷で育ったおかげでな。

とその事を物語っている。そして

In faith, he is a worthy gentleman,

いや、あれでなかなか立派な紳士だぞ、

Exceeding well read, and profited

古今の書物をよく読破しているし

In strange concealments, valiant as a lion

And wondrous affable

人間業とも思えぬ神秘の秘法にも通じている。獅子のごとく勇敢であり、同時に物腰はやわらかい

3幕1場

然しながら1399年には、前イングランド王の王位篡奪者である現王ヘンリーIVの支持者であった Marcher Lord 辺境守護職の Sir Reginald Grey との間で隣接する土地問題で衝突を起し、その決着を法廷に訴えたが公正な裁きは得られず、その代わりに英国議会から彼が受け取った反応は “裸足のウェールズの犬に何をかまうことがあろう” という冷たいものであった。

彼のイングランドに対する怒り、それを支持する民衆の志気は上がった。戦いは1400年北東ウェールズでその火蓋が切られる。シェクスピアの Henry IV より再び引用しよう。

Three times hath Henry Bolingbroke made head

あのヘンリーボリンブルックは、三度までおれに戦をしかけた。

Against my power; thrice from the banks of Wye

そしておれは三度ともワイ河の岸辺、

And sandy-bottom'd Severn have I sent him

セヴァン河の浅瀬から追い返した、

Bootless home and weather-beaten back

やつはなに一つ得るものはなく雨のなかを逃げ帰った。

3幕1場

1403年の春には Sir Reginald Grey を捕らえた後、身代金を少々と引き換えに彼を解放する。反乱は様々な名門家や王朝を巻き込んで拡がりを見せる。Glendower の娘の中の一人である Jane は Edmund Mortimer の許に嫁いでいるが、そ

の夫 Mortimer 自身はイングランドの王座につく野望もあってイングランド王への反乱に加わる。ウェールズの大義への支持はフランスから、そして又ノーサンバランド伯の息子 Percey からも受けていた。暫くの間は天はウェールズに味方したかのようにであった。ひとときではあるが彼はウェールズのほぼ全域をイングランドの支配から解放する。

Machynlleth の地において Glendower はウェールズ独自の司法制度、議会そして二つの 大学を設置する事を公布し事実上、統一されたウェールズの独立宣言を行う。然し Glendower の勢いは衰え、やがてウェールズの地は焦土と化してゆき、彼は次第に北ウェールズに押しやられてゆく。後に Henry V となる Hal 王子の率いる軍勢によって Glendower の館は焼き討ちに遭い Glendower の占拠していた城は取り戻され、略奪を受ける。

彼の隊長は殺され、彼の家族は捕虜となる。彼を支援していたウェールズの町や村々は困窮して降伏を余儀なくさせられる。反乱は先細りとなってゆく。Henry IV は“裸足の犬”に対して報復的な法を制定し、ウェールズの人々は英国の二級市民 the second-class citizen となる。

以後ウェールズ人は自衛の武器の携行を許されず、ウェールズ語を話すものは公職に就くことも出来ないし、地主にもなれない。ウェールズ人はイングランド人との結婚は出来ないし、イングランドに住むことも許されない。集会は如何なる目的であれ、開くことは出来ない。イングランド人はウェールズ人の陪審員によって裁かれることはない。ウェールズ人と結婚したイングランド人はその人の持つ全ての市民権を失う。などと言った厳しいものであった。

Glendower の身の上の結末については彼の側近の騎士達と共に身を隠したと信じられているウェールズの丘陵地帯のもやの中に包まれて霞んでいる。彼の最後を見た者は誰もいない。1415年に Henry IV の後を継いだ Henry V が王の名による特赦を伝えたが何の返答も返ってはいなかった。

彼の企ては挫折に終わったものの、他国の支配と圧制から人民と国土を解放しようとした彼の意気はその後もウェールズの人々の中に長く生きることになる。シェクスピアの「ヘンリー 四世」を読んだ時、読者はともすれば国王ヘンリー IV の側を官軍と見なしグレンダウアーの側一括りにして叛軍と見なし勝ちである。これは「ヘンリー 四世」がイングランド側から見た政治秩序とその倫理を基盤において描いた作品であることを、読者がその記述をブリテン島の歴史そのものとして眺めようとした結果である。そこにはウェールズ側からの視点は欠落しているのである。

ウェールズにおいては恰も彼はオーストリアの圧制からの解放者として知られるスイスの伝説上の英雄ウィリアム テル、フランスの国難を救おうとしたジャンヌダーク、そして一時期ながらロンドンをローマの支配から解放したケルト系イケニ族の女王ブーディカにも譬えられている。ウェールズにおける国民的英雄像として彼は今も尚生き続けているのである。

その2. Rebecca の暴動

...Be thou the mother of thousands of millions,

あなたが数十億の母親となれ、そして

and thy seeds possess the gate of those

あなたの子孫に憎しみを懐く人々の門を

which hate them...GENESIS 25

奪い取れ

旧約聖書創世記24章

1840年にイングランド人の不在地主に対する反感がウェールズの借地人の間で昂まった。1835年に英議会は the Highway Act を布き、政府より資金の融資を受けた road trusts の手によって道路整備を行おうとした。幾つかの料金徴収所を設けてその資金の返済と歳入を計ろうとするものであったが、これは旅を必要とする場合の農民に新たな負担を強いるものでもあった。

何時もは聖書の神に敬虔なウェールズの農民はこれには怒り、女性の衣裳に仮装した一団が料金徴収所などの打ち壊しを行うに至る。上述の引用

文の中に登場する Rebecca の暴動と言われる所以はここにあるのである。

暴動は発展して三千人の同調者に膨れあがり、「自由と、よりましな暮らしを」の標語を旗印とする。料金徴収所以外のものも破壊の標的として、カーディフの公共建築物の焼き討ちなども行う。Rebecca の娘達、つまりその活動に加わった者の中の指導者は捕らえられて護送されるが、road trusts は撤廃されて料金負担は圧縮される事になる。

その3. 今世紀におけるウェールズ民族文化の独立運動

民族自決主義を掲げるウェールズ国民党 Plaid Cymru が詩人の Saunderson Lewis を主唱者として二つの知識グループを糾合して1925年に設立される。その主たる目的はウェールズの言語文化を他からの浸食される脅威を取り除くことにあった。

1936年に航空省が英国空軍の爆撃訓練所をウェールズ語通用地域の中心部である Llyn 半島の Penrhos に設立する事を決めた。このような軍事基地があることによってウェールズ語が必然的に破壊されるとの抗議がその後数年間に亘って行われたが、政府はこれに耳を貸そうとはしなかった。

1936年に9月8日3名の男が警察に自首してきて自らの犯行を自白した。Saunderson Lewis もその中に含まれ、又そのうちの1名は学校の教師であった。彼らは爆撃用の射撃場の構内に侵入してその施設に放火したと言うのであった。その裁判において被告達は法廷ではウェールズ語以外のいかなる語を使用を拒否する事を宣言した。裁判長は率直な驚きを示しながらも当裁判は the law of England イングランドの法によって行うものであると応酬した。

公判中、被告達はウェールズ語を使い続けた。これはウェールズにおいて英語が強制的に法律用語とされて以来積年にわたって英語の話せない被告が不当な判決に甘んじていた歴史への抗議のメッセージでもあったのだ。学校教師であった被告の

1名はその場の通訳をつとめることを許されたが、他の2名は英語つまりイングランド語が話せる者であるかどうかの立証が出来なかったからである。判決は有罪となり9ヶ月の禁固刑が決まった。

1939年に勃発した第二次世界大戦はウェールズとイングランドの問題点の様相を複雑にする。ウェールズ解放運動家の問いかける“イングランドはウェールズ青年を戦場に駆り立てる何の権利があるのか”もナチの空爆範囲がウェールズに及んでいる現実の中では寧ろ利敵行為と見なされる難しさを伴った。

NB アイルランド共和国は第二次世界大戦中、連合軍の対独統一戦線には参加しなかった。ウェールズと同じくケルト族であって長い年月にわたるアングロサクソンによる支配をうけた事への心理的な後遺症のためか、独立後は、嘗ての宗主国であるウェストミンスター議会及び英国国王への忠誠に躊躇いをもたらしたのであろう。

一方ではウェールズ語しか識字能力を持たない初老の夫婦が戦線にいる我が息子に電報を送ろうとしたところそれが英語でないと郵便局に断られると言う事件が起きたりした。1942年に政府はウェールズ裁判法廷においてはそれによって被告が不利になる限りにおいてウェールズ語の使用を認める法案 Welsh Courts Act が導入される事になる。

民族自決主義者の運動は1952年に Y Gweinethwyr と名乗るグループがウェールズの貯水池からイングランドのバーミンガムへ送水するパイプラインの爆破を企てた。又、北イングランドの都市への送水量を確保するためウェールズの谷間の集落を水没させて新たなダムを建設する計画に反対運動が世論の支持を得て盛り上がりを見せる。1963年には爆破事件も起こり、逮捕者も出る。1960年代には Free Wales Army として知られる小規模な民兵組織が生まれて制服に身を固めウェールズの旗を振りかざして抗議行動の群に加わって警察の注意を惹く。

1967年英国の王権の推定相続人である Charles 王子 the Prince of Wales がウェールズ大学に

において6週間のウェールズ語の短期学習を終えて Caernarfon 城で立太子の礼を挙げる事になった。

警察、英海空軍兵士の水も漏らさぬ程の嚴重警戒の中をMAC(ウェールズ語 *Mudiad Amddiffyn Cymru* の頭文字の省略で意味は Movement for the Defence of Wales である)は数個の爆薬を仕掛け、その内の一個は王室列車が通過して僅か十分後に鉄路上で爆発した。

立太子の式典の朝 MAC のメンバーの中10名の者が死亡し、その一方では Caernarfon 城の城壁の真下でトラックが爆発し一名の兵士が殺害された。式典の最中に21発の礼砲が轟いたが22発目の砲声は MAC 側の放った爆発音であった。これはウェールズ国民の英国への服従を再確認させるために行われるこの式典への彼らのいわば肉肉の贈り物であったのだ。

英王室がこの城を訪れ、女王のお召しの馬車が通りかかった時、「ウェールズの prince Llywelyn は生きている。いかなるイングランドの皇太子も Prince of Wales にはなれない」と書かれたプラカードが見られ又卵や腐った果実が投げつけられた。その一個の林檎はあわや命中するところであった。英国政府の予想では25万人の見物客があるものと予想していたが僅か9万人が見物人があつたに留まった。

1980年代を迎えようとする時、イングランド人の持つウェールズの休日用の家が焼き討ちの標的となる。ウェールズの過疎化によって生じた空き家を買取り、それを holiday home にしようとするイングランド人が増加してその数は3万軒に数えられるようになっていく。その理由としてウェールズの家が自然環境に恵まれているのも一つの魅力ではあるが、売却価格がイングランドとウェールズとでは 3 : 1 の割合なのでイングランドの家を手放すことによって得られる差額金を基金にしての利子の配当も又魅力となって、停年で職を離れた老家族の住まいとしても人気を集めている。

1979年にはそのうちの30軒の家が攻撃の対象と

なった。1984年迄には100軒もの家が焼き打ちされてその被害総額は50万ポンドにも達した。MAC が放火攻撃の背後にいると云われ又“グレンダウアーの息子達” Sons of Glendower という別の団体も現れたりして警察当局は神経をとがらせて52名の容疑者を合法或いは非合法に検挙している。時限発火装置の取り付けを含め、攻撃対象は不動産業者、鉄道駅、保守党のカーディフ支部等へとその対象に拡がりを示す。

逮捕者には、その裁判も行われるが被告の有罪性については爆発物の所持者についてはともかく爆破の陰謀への参画については陪審員も確かな立証を行うことが出来なかった。

これまではいわば非法な暴力活動によるイングランドへの抵抗運動、イングランドからの分離独立運動を見てきたが議会主義国家英国において選挙を通じての示される大多数の民意の反映はどうであろうか。二大政党政治のお手本の国である英国にあって新しく誕生した新党が急速に大きく勢力を増してゆくことは難しい。保守党と労働党の狭間にあってウェールズ選出の国会議員38名中3名がウェストミンスターで活躍しているのが現状である。そして又1979年に時の政府より問いかけのあった制限付きながらウェールズ自治政府への移行についての国民投票の結果はウェールズの人々によって拒否されている。ウェールズの national identity を欲しながらも nation としての経済的な自立の将来的な可能性や英語の普及した現実の社会環境を考えた時、時の流れを逆流させる事の難しさを国民が良く知っているからであろうか。

[IV] ウェールズ語の歴史とそれを取り巻く環境

ウェールズ語は英語の一方言ではなく独立した国語である。ウェールズ語はケルト語の一支流でありそのケルト語の源流は印欧語にその端を発する。嘗てケルト語がヨーロッパの言語地図の中心を占めていた時代もあった。

ケルト人は中央ヨーロッパから西は大西洋岸に

達するまで、そして東は現在のトルコのガラテヤ地方にまで拡がって暮らしていた。ちなみにロンドンの地名はケルト語 Londinium に、又、ウィーンと言う都市名もケルト語の白い都市 Vin-dobona に由来する。そして又、パリのノートルダム大聖堂があるシテ島は500 B Cにケルトの一氏族で Parisii 族がこの地に住み着いた事から Paris と言う地名が生まれたことが知られている。Paris とは boat の意味を表すケルト語であった。

ここに基数の1~3に相当する現在のウェールズ語と、同じく印欧語の流れを汲むヨーロッパの言語との対照を見てみよう。ケルト族とラテン、ゲルマン民族との接点の一端を見る事が出来よう

国語	数	1	2	3
仏語	語	un	deux	trois
西語	語	uno	dos	tre
伊語	語	uno	due	tre
独語	語	ein	zwei	drei
英語	語	one	two	three
アイルランド語		aon	do	tri
ウェールズ語		un	dao	tri

ケルト語はローマ帝国の拡大、そしてゲルマン民族の大移動に遭遇してゆく中で、その言語、文化と言った民族的な特性を失ってゆく。そしてそのケルト語は七世紀にはヨーロッパから姿を消すことになる。

ローマによる征服を逃れ大陸からブリテン島に渡ったケルト族はそのブリテン島においても又ローマやアングロサクソンの来襲に遭って、更に西方への逃れたため、彼等は他文化の影響から辛うじて免れてその特性を何とか保つ事が出来た。

ラテン語の現在のウェールズ語へ影響も幾つか見られる。ウェールズ語 *egles* はラテン語の church から、*barwn* はノルマンフレンチの baron からの借入語である。

英語の car は、ウェールズ語でも *car*、アイ

ルランド語で *carr* となるが、この語の語源はラテン語で二輪馬車の意味である。chariot, carry, carriage, career, caricature, charge, course, current などについても同語源である。carpenter とは carriage 馬車の製造者と言う意味であり、これ又、同語源である。

大陸のケルト語の一部はラテン語に吸収される。それらの中から借入語として改めて英語に入ってきているものもある。ambassador の場合、Gaul 地方で使われていたケルト語 ambactos がその語源である。それがラテン語に借入されて陪臣 vassal の意味を持つ ambactus になり、更にゲルマン語に借入されて servant, messenger の意味の ambaht となる。それが今日の独語の官職を表す Amt となっている。英語の rich, 独語の Reich もケルト語からの借入である。アイルランド語の ri 王もこれと共通の語源を有するものである。

島のケルトの言語はゲール語系 Goidelic group と Britonic group に分かれている。前者はアイルランド、北スコットランド、マン島などに残り、後者はウェールズ、コーンウォール、フランスのブルターニュなどに残存している。

English	son	head	worm	feather	everyone
Welsh	ap	pen	pryv	pluv	paup
Irish	mac	cenn	cruive	cluv	cach
German	Sohn	Kopfen	Wurum	Feder	jeder
French	fils	tete	ver	plume	chacun

Goidelic 語は「Qケルト語」そして Brythonic では「Pケルト語」と呼ばれている。

上の表から見ても分かるように Q と発音が同じ C で表されているのがゲール語で、Pの方がウェールズ語となっている。ウェールズ語のアルファベットは26の単文字と8種類の連文字(LIのような)から成り立っている。

英連合王国における最古の文学、文献はウェー

ルズ語で書かれている。驚くことに、それはウェールズではなく南部スコットランドにおいて書かれているのである。当時その地方で暮らしていた人々の日常語でもあったケルト系の言葉ウェールズ語のその地への拡がりを示すものであり、Aneirin とか Taliesin とか呼ばれていた宮廷詩人達によって書き綴られたものである。島のケルト人は一時期、ローマの支配下におかれるが、イングランドにおける程の影響に染まることはなくその後、アングロサクソンの進出にも抵抗を示す。

ところで六世紀末はイングランドはアングロサクソンの時代で、7つの王国があり、その中で最も強力な王 Offa の支配下にあり、王は自らを “King of the English” と称していた。現在の Midland 地方 Mercia は王の直轄地であり、彼は又、ケルト系住民をブリテン島の西の半島の地域に閉じこめて、その基本的な境界線を定めた。それを異邦人の土地を意味するよそ者 “weahlas” の地 Wales と命名した。ドイツではイタリー人、フランス人を始め外国人を指して独語で die Welschen と呼ぶ。welsh, weishen とは外国の、外国語を喋ると言う意味を表していて、英語、独語ともにアングロサクソン系民族に対する異邦人と言う意味での共通性を持っている。ウェールズ語では人々はそれを Cymru つまり the land of comrades 同胞の地と呼んでいる。

八世紀に入って、王はセヴァーン川とデー川と間に両国の境界を区分する dyke 土塁を建設する事を定めた。以後数世紀に亘ってこの Offa dyke はイングランドや北欧民族からの侵入を防ぐに役立つ事になる。

Cf. これはローマ帝政期にイングランドとスコットランドとの境界線に築かれた Hadrian Wall, ハドリアヌス帝の建てた軍事上の長壁に対比せられものである。一方 Hadrian's Wall の方はその長さ117キロにも及び、その着想のヒントは中国の万里の長城にあるとも言われている。

紀の頃であったと認められているが、手書きの文献として残っているのは九世紀以降である。

印刷術による最初の文献の出現は1546年の事である。1548年には William Salesbury がウェールズ語⇔英語辞典を発行し、その2年後にはウェールズ語学習法を執筆した。1567年には Griffith Roberts がウェールズ語文法書を発行した。

更に1568年にはウェールズ語版の新約聖書及び祈祷書が、そして新旧両聖書は、1588年に世に出たのである。

シェクスピアの「ヘンリー 四世」の3幕1場では中でグレンダウワーの娘の夫であるモーティマーは

This is the deadly spite that angers me;

ああ、じれったくてたまらぬ、妻は英語が、そして
My wife can speak no English, I no Welsh.

おれはウェールズ語が一言も話せぬとは

そしてその直後の親子の場面のト書きには

Glendower speaks to her in Welsh, and she answers him in the same.

とあって、父の方はその昔ロンドンでの生活経験を持つ bilingual であるのに、一方の娘の方は当時の上流階級に所属していてもウェールズ語の monoglot で、英語は話せなかった当時の言語社会事情を反映している。

NB 連合法は制定当時は Acts of Annexation 併合法であったのが十九世紀になってウェールズ人の国民感情に配慮して Acts of Union 統合法と名称を改めたものである。

然しながら、1536年のイングランドとの連合法が施行されてイングランドのウェールズへの完全統治が確立される。以後、ウェールズ語は守勢の立場に立つことになる。

English のみが法制上の公語の地位を保つ事となる。ウェールズにおいて公語に語ノものは爾後

歩み始める。

嘗ての吟遊詩人, Bards は詩歌や音楽を総合して美しい言葉, 文字を口頭で人々に伝え, ケルト族の文化的な財産となっていたがその活動も次第に衰微してゆく。1746年には英国議会はイングランドと言う名称にはウェールズを含むものとする事を立法化した。ウェールズは征服された国であり, その地に英語を持ち込むことこそ統一国家にとっては肝要である。英語を奨励しようと努力する事は牧師の責務となる。

かくて英国国教会ではウェールズで暮らす牧師はその教区の多くの信者がウェールズ語を話している現状を無視して英語による布教を行うことをその施策と決める。然し, 後にこれは改められる。

礼拝におけるウェールズ語の取り入れは非国教会派のチャペルで始まった。英国国教会もそうした言語政策を続けると信者を非国教会への流出につながると判断して1837年には始めてウェールズ語による結婚式の挙行の実施やウェールズ語の話せる教区牧師の派遣に踏み切るのである。その一方では, 紳士階級のエリート達はウェールズというよりも英国 Britain 全体を単位として自らの民族的な帰属性を自覚するようになり, 同じ階級に所属するイングランドの子女との結婚や又自らの子弟をイングランドに遊学させるようになる。その結果, ウェールズ語の流通度は急速に衰えを見せる。

cf. ウェールズと同じくケルト系の血をひくアイルランドにおいてもこれと類似した現象が見られた。それは James Joyce の小説 *Dubliners* の中の *The Dead* の途上人物の会話の中に現れている。

Gabriel Conroy は大学の教壇に立つ身である。彼の pedantry はクリスマスパーティの席において彼の口から流露する。彼は居合わせた人達から West Briton と揶揄される。自国アイルランド文化や言語への軽視, 英本土や大陸ヨーロッパ文化への崇拜などの彼の姿勢, 彼の文化上の帰属性は一体何なのかと問いかげられる。And have't you your own language to keep in touch with

Irish? に対してもその返事は次のように冷ややかである。

Irish is not my language.

知的指導階級に属する人達が自らの国に対して文化的愛国心を持つとしない。自国文化を何か野卑なもの *lingua rustica* と見なし勝ちであるのはウェールズと同様であった。

ところで二カ国語が共存する二十世紀後半におけるカナダの言語社会地図と比較考察してみよう。1951年にはカナダ人の29%がフランス語が自分の母語であった。1981年には25.9%に下がっている。彼らがそれぞれ属する社会の経済基盤を見てみるとフランス語を使用する人々の方が一般的に貧しい。そこで社会的上昇志向の者にとっては英語を日常語として選ぶ方が経済的なエリート層に食い込むのに有利であると考えられるからであろう。

ウェールズの場合についても同様な事が言えよう。十九世紀前半の四半世紀まではウェールズ語を話す人はまだ全人口の80%はあった。十九世紀にウェールズ語の余り話されていない南ウェールズへの人口移動が起り, それがウェールズ語使用人口の減少の一因となる。

学校ではウェールズを話す事は禁じられるようになる。Welsh と言えど勿論“ウェールズの属性”を示す意味の言葉である。それが普通名詞化して corrupt を招き, 小文字で始まる welsh となると“義務などを回避する, 約束を守らない”の意味となる。OEDの初例は1857年となっている。ウェールズ語は徳性の進歩と商業上の繁栄を邪魔するものであり, それはウェールズ人にとってその使用は好ましくないものであると英国支配層及び政府政府には考えるようになる。学校においてウェールズ語を話した生徒は見せしめのために首の廻りに ウェールズ結び Welsh knot をかけられて, 次にウェールズ語を話した生徒の首につけられる。

knot とは布の結びの意味であるが, このウェールズノットは Welsh Not つまりウェールズ語の使用は駄目と言う意味の語として転用される。この場合には首の回りに木札をぶら下げ見せしめ

としてその生徒を晒し者とするやり方が採用された。ノットは失敗する生徒の首に次々と掛け替えられる。その日の終わる時、最後にそれを着用している生徒は鞭打ちの罰を受ける方法が行われた。

1870年には、その制定によって結果的にはウェールズ語が徹底的には破壊されることになるための“教育法” the Education Act' がウェールズの世論を無視した形で制定される。これによってウェールズの学校では英語がくまなく強制されることになる。

1866年9月8日付けのロンドン「タイムズ」は次のような社説を掲載する。“ウェールズ語はウェールズの災いである。ウェールズ語の普及と英語の無知と言う状態はこれまでに除去されてきている。今日ですら尚それは文明や、彼らの隣人であるイングランド人の持つ進歩や物質的な繁栄からウェールズの人々を除外している。その時代遅れの半野蛮的な言語が彼らを暗黒の中に包んでいるのだ！”

ウェールズ語使用者の歴史的推移を見てみると、1901年迄にはウェールズの総人口2,012,876の中、およそ **929,824** であり、その中の280,905はウェールズ語だけしか話せない monoglot の人達であった。

1961年には総人口2,518,711の中 **656,002** がウェールズ語を話し、26,223は monoglot であった。1981年の調査では **503,549** の人達がウェールズ語を話し（総人口の18,9%）その中で21,283名が monoglot である。

cf. ケルト系の言語を持つアイルランドの場合十八世紀の半ば全人口の3分の2が日常語としてゲール語を話していた。一つの言語調査によれば十九世紀前半には475万人の人口の中の240万人がゲール語を話し、更にその中の80万人は monoglot であった。その他は英語を話していたものと推定されている。1851年にはゲール語を話していた人達の数に152万人強、全人口の23.3%にと推移している。1901年になると14.4%にまでその数は落ち込む。monoglot の数は僅か2万人となり全人口の0.5%となる。現在は全体の11%の人達がゲール語

を話せる状態となっている。

スコットランドの場合1881年にはゲール語を話す人達はスコットランドの人口の6.8%その数は25万強であった。1961年の調査では1.66%となっている。

このようにケルト系の語が衰微の一途を辿っている中であって復権運動も行われている。ウェールズにおける一つの例を見てみよう。

Glamorgan 郡の一地方では1950年代に9名の子供達が田舎の教会でウェールズ語の学習を始めた。2年後には普段英語で授業を行っている公立学校の一クラスがウェールズ語での授業が可能となりそこに4才から11才までの11名の生徒が入学した。そのクラスへの関心は徐々にではあるが高まってゆき、その数も増加する。次にはウェールズ語で全て授業を行う公立の Welsh school が Stenghenydd に設立される。49名が入学した。そこに通う生徒の家庭では両親が日常会話を英語で行っていると言う言語環境の中での新たな学習である。

外国語としての英語の授業は英語科目として行われるがその他の授業つまり数学、理科、音楽などは全てウェールズ語を媒体として進められる。そしてそこを卒業した学童は同じくウェールズ語を以て学習する Welsh-medium 中等学校に進学する。

NB 1962年のウェールズ語を主とする中等学校が始めて開設されている。

このようなウェールズ語保護の運動及び施策の中でウェールズ語を話す子供達の数に着実に殖えてきてはいるものの、彼等が成長後、ウェールズ語を使い続ける生活展望が開けているかという点必ずしもそれは明るくはない。仕事が無ければ彼等は生まれ育った地を離れざるを得ず、その場合には英語に慣れてきた方が生活に有利である。

一方でイングランド人のレジジャーホームを求めてウェールズへの人口流入の問題もある。移住者達はウェールズに来て後でも Englishness を決して手放そうとはしない。彼等にとってウェールズで暮らすことはイングランド地方の一地域で

暮らすのと同じである。ウェールズらしさやその特異性に染まることを望まないのである。

1962年に Saunder Lewis は BBC 放送のラジオスタジオから“言葉のないところに国家の独立はない。ウェールズ語に法制上の地位を与え、郵便局、裁判所や各役所の掲示板など幾つかの特定場所にはウェールズ語を記すように”と人々に熱っぽく呼びかける。

1963年にはその趣旨を訴える街頭デモの人達の列に英語のみの使用に賛成派の無頼漢達が襲いかかる。その事件が広く知られてゆく中で1967年に英国政府は Welsh Language Bill の法案採択の反応を示す。'67年にはウェールズ語法 Welsh Language Act が施行されて英語との対等な共存が合法的な正当性を持つことになる。

1970年代に入ってテレビ放送に新しく“チャンネル4”が設立される計画の中で、そこではウェールズ語による放送が予定されていることを知った英政府はその許可を渋った。その結果、二年間にわたる抗議運動を招くに至る。多数の人々による1980年には公共放送の視聴料金の不払い運動や、そして更にハンストによる抗議にも遭って遂に政府はその盛り上がり屈して1982年にウェールズ語による新しいチャンネルを開設することに同意するに至るのである。

その後ニュース番組、ドラマを含めてウェールズ語の放送時間は着実に伸びを示している。そして又、ウェールズ語で書かれた書物は年間およそ400冊が出版されている現状である。これらウェールズ語復活を促す言語環境としての学校教育及び社会環境の整備によって最近では若い世代においてウェールズ語の活用が見られるようになる。将来ウェールズを使って小中学校で教壇に立つ事を志望する大学生もその数を増している。1991年の言語人口調査では始めてウェールズ語の衰退現象に歯止めのかかった事、若年層においてウェールズ語の通用が微増していることをその数字が示していてウェールズ語の未来にほのかな曙光を投げかけている現状である。

結びに当たって在日 Welsh の C. W. ニコル

氏の言葉を引用しておく。

・・・この「母なる言葉」は生き残った。それはまさに奇跡と言えるほどであった。英語などという言葉が使われ出したのは、今からわずか900年前である。ウェールズの詩人たちは、それより二千年も前から詩と音楽を書いていたのである。・・・中略・・・当時イングランドの連中は、ウェールズ、スコットランド、アイルランドに伝わるゲール語を、二流言語におとしめようとしていた。だがその試みは失敗した。いまウェールズでは、学齢期に達した子供たちはウェールズ語でも、英語でも好きな言葉による教育を選ぶことが出来る。・・・中略・・・今日では、ウェールズ語はもはや伝統的な吟遊詩人とか辺鄙な谷間に住む人たちが使うだけの言葉ではなくなっている。今やそれは若いインテリ層の言葉となっているのだ。後略・・・⁶⁾

あ と が き

以上見てきたようにウェールズの場合、イングランドからの政治的乃至経済的な独立を究極の目標として達成しようとしているのではなく、当面の解決課題としては文化的な独立、特にウェールズ固有の言語を保護することにあるように思われる。

言語の場合、その文化財の保存といえ、とかく、ラテン語の場合におけるようにそれを死語として認めた上で研究の必要から文献解釈上、文法とか注釈を整備し、後世の学者のための資料保存に力を注ぐ意味と思われ勝ちである。そうではなくて Welsh を、話し言葉として currency に乗せ、国際性の強い English と共に bilingual の形で共存させようとの思惑があるのである。

将来 UC から UE へと全ヨーロッパの統合が進んだ段階では新ヨーロッパ連邦又はヨーロッパ合衆国？の中でウェールズはドイツ州？の独語、フランス州？の仏語、England 州？の English と全く同じレベルにおいての Wales 州？の Welsh を夢見ているようにも思われる。

軍事、政治、経済などの共通利益が異民族の統一又は共生を軌道に乗せる一つの要素ではあるのも事実ではある。然しその一方では、その統一体も、ともすれば多数派の民族感情から言語や文化の同一なるものへの帰属とそれへの忠誠を求める。そして異なるものへの排除に向かう自然発生的なエネルギーを生む。それは人間の長い歴史が示すところである。

フランスの場合には、仏語の他、オック語、ブルトン語、アングロノルマン語を、そしてスペインでは西語の他に、カタロニア語、バスク語やガリシア語を抱えている。米大陸においてもカナダでは国全体としては英語圏でありながらフランス語が話されるケベック州を含んでいる。

このような国々では絶えず国が求める全体としての求心力と同時に個々の独立した文化を求める民族感情と言う遠心力が渦巻いている。

ヒトラーによる汎ゲルマン主義を掲げての対外膨張政策も、スターリンの連邦内民族強制移住政策も、更に又、パレスチナや、社会主義崩壊後のソ連邦、そしてユーゴスラヴィアなどの民族紛争も、或る意味では同じ根元の現れと見ることも出来よう。

ソ連邦崩壊後、現実政治における東西緩和や旧共産圏諸国の市場経済制度の導入に伴って変化を生んだ。学問の世界でも嘗て二十世紀前半から半ばにかけ貧富、労資間の階級対立のないたユートピア社会実現のためのバイブルとして広く信仰を集めていた Marxism はすっかり影を潜めてしまった感がある。それに代わって社会問題として男・女それぞれの、家庭及び社会における関わりのあるあり方を問う feminism が隆盛を極めている。社会学としては勿論、文学や歴史の分野にもそれは apply されて多くの関連図書が出回っている今日である。民族間の問題も同様と云える。

日本の場合、国内にあっては単一の自国語を、そして海外に出た場合には、国際通用語として学校英語、学校文法さえしっかりと押さえておけば、その際、何とかコミュニケーションと国際交流が事足りると安易に考えている人が多い。

まして難民問題などを起因として、嘗てのゲルマン民族の大移動のような現象が起こり、或る意味ではローマ帝国にもなぞらえる今日の日本がその余波を受けるが如き事態を予想する人も少ない。まして、島国日本が将来において言語の異なる複合民族国家によって構成されるなど考えている人は皆無に近いと言える現状がある。世界が国際化されてゆき、その中で政治、経済、文化の面で国家間は勿論、国内問題としても民族間における過去の支配、被支配の歴史が問い改められる。互いの対等な主張と交流、そして言語を含めた異文化との共生が求められようとしているのが今日の世界である。民族問題とその歴史的な経過や今後の展開のゆくえなどについては、政治課題として単に見つめるだけでなく、学問研究の立場からも一層の注目を向ける必要があるのではないかと思うのである。^{a)~1)}

引用文献

- 1) The Fowler's Modern English Usage Third Edition Edited by R. W. Burchfield Oxford より
- 2) a quotation from "A WALK THROUGH WALES" by ANTHONY BAILEY pp.149~151
- 3) 白水社 ルイ・カザミヤン著 手塚リリ子・石川京子共訳 大英国 370~371より引用
- 4) 白水社 シェクスピア全集 小田島雄志 訳 以下のシェクスピア引用文の訳者は同じ
- 5) a quotation from "A WALK THROUGH WALES" by ANTHONY BAILEY pp.165~166
- 6) 朝日選書 世界のことばより pp.130~131

参考文献

以下の文献から特定箇所の直接的な引用は特にない。構想とか視点とかの面で小論の全般的な下敷きとなっている。色々な角度からの影響が錯綜した形となって現れていると思われるのでその書名を列挙しておく

- | | | | |
|------------------------------------|---|-------------|--------------------------------|
| a) Jermy Black | A History of the British Isles 1996 MACMILLAN | l) 千田 善 | ユーゴ紛争 同上 |
| b) Peter Berresford Ellis | The Celtic Revolution
A study in Anti-imperialism 1985 Yllolfa | j) 柴 宣弘 | ユーゴスラヴィア現代史
岩波新書 |
| c) Wendy Davis | Wales in the Early Middle Ages 1982 Leicester University Press | k) ピエール・リシェ | 蛮族の侵入ーゲルマン大移動時代ー 白水社 久野 浩訳 |
| d) J. Gwynfor Jones | Early Modern Wales 1994
St. Martin's Press | l) キュイズニエ | ヨーロッパの民族学 同上
樋口 淳 他訳 |
| e) Phillip Jenkins | A History of Modern Wales 1992 Longman | m) 山内 昌之 他 | いま、なぜ民族か
東京大学出版会 |
| f) Myles Dillon & Nork K. Chadwick | The Celtic Realms 1963
Widenfeld & Nicolson | n) 宮島 喬 | ヨーロッパ社会の試練 同上 |
| g) Gerald Morgan | The Dragon's Tongue 1966
H.G. Walters Ltd. | o) 中野 祐二 | フランス国家とマイノリティ
国際書院 |
| h) はばくみこ | 統合ヨーロッパの民族問題
講談社現代親書 | p) 内藤 正典 | もうひとつのヨーロッパー他
文化共生の舞台ー 古今書院 |
| | | q) 西島 建男 | 民族問題とは何か
朝日選書 |
| | | r) 山本近佳子 | 外国人襲撃と統一ドイツ
岩波ブックレット |
| | | s) 浅井 信雄 | 世界民族地図 新潮文庫 |
| | | t) 中村 義博 | ユーゴの民族対立
サイマル出版会 |